■モーツァルト：セレナード第13番《アイネ・クライネ・ナハトムジーク》／同第6番《セレナータ・ノットゥルナ》／ディヴェルティメント第10番

CD 31

ペッテル・スンドクヴィスト指揮
スウェーデン室内管弦楽団
［ナクソスⒹ8.557023］
オープン価格

藤田由之●*Yoshiyuki Fujita*

ペッテル・スンドクヴィスト指揮のスウェーデン室内管弦楽団が、ナクソス・レーベルにモーツァルトのセレナードとディヴェルティメントを収録したが、その演奏ではスタイルの上でかなりユニークなものもみられ、それが好みを分かつということもありそうだ。

指揮者のスンドクヴィストは1964年生まれ、スウェーデンの歌劇場ではすでに20作をこえるレパートリーを指揮する一方、現代音楽にも強い傾倒をみせ、40曲をこえる北欧の作曲家たちの作品の初演も指揮しているという。すでにヨーロッパ各国にも客演するとともに、スウェーデン各地のオーケストラのポストを歴任し、スウェーデン室内管弦楽団では首席客演指揮者もつとめていた。なお、この楽団は、ストックホルム西方170キロほどに位置するオレブロに拠点をもつスカンディナヴィア稀少の常設室内オーケストラであり、年間100回をこえるコンサート活動を続けているという。

ここに収められている曲目は、まず《アイネ・クライネ・ナハトムジーク》であるが、用いられている楽譜はクリティカル・エディションと思われるが、そこに聴くアーティキュレーションには、かなり独自の解釈もみせている。そこで与えられた新たなスラーが、この作品にまったく別の印象をのこすこともないとはいえない。それに、テンポの変化と表情が、旧知のこの作品をかなり変貌させ、変質させているといった感もないではない。

《セレナータ・ノットゥルナ》（セレナード第6番）は、ユニークな編成のおもしろさもあるが、これもかなり思い入れの深い表現に終始しているようなところがある。とくに第3楽章では、当然のようにコントラバスのソロにかなりのカデンツァをもたせている。ティンパニについては、トレモロにとどまっているのが対照でもあるが、これにもいろいろな見方があるかもしれない。

もう1曲は、ここでは《ロドロン夜曲》第1番とされている《ディヴェルティメント》第10番ヘ長調K247であるが、ここでのこの作品は、他の2曲とはかなり距離を感じさせるところがある。弦楽と2本のホルンによるこのディヴェルティメントは、比較的演奏の機会が多いとはいえないが、ここではかなりスタンダードなスタイルをもった演奏として、うけいれられる可能性がある。